

聖ラデグンデイスとビザンツ宮廷(3)

——ポワティエの「十字架」の宗教的政治的背景——

橋 本 龍 幸

III 「主の十字架」の木片贈与の宗教的背景

1 ユスティヌス2世の即位と治世

ユスティヌス2世に関しては、これまで歴史家の間でほとんど注目されてこなかった。その理由は、第I章の冒頭でもふれたように、1つには彼の治世がビザンツ史上でも燦然と輝く2人の著名な皇帝、すなわちユスティニアヌスとヘラクレイオスの治世に挟まれた「谷間」の時代であり、影の薄い一時期であって、一般に「ユスティニアヌス時代」に付随して、あるいは「ユスティニアヌスの後継者時代」のなかで一括して扱われる傾向が強かったからである⁽¹⁾。

いま1つ、ユスティヌスに視線が注がれない理由として、彼自身の精神的疾患をあげることができよう。彼は先帝ユスティニアヌスが遺した膨大な負の遺産に耐えきれず、治世中に精神のバランスを崩し、躁鬱状態に陥り、周囲に対してしばしば独裁的、懐疑的となり、攻撃的な態度をとった。また晩年には結石による有痛性排尿困難症にかかり、リュウマチ性諸症状も現われたと推測される⁽²⁾。こうした肉体的な苦痛は彼の精神的症状を倍加させたであろう。それゆえ、ほとんどの歴史家がユスティヌスの態度や政策に共鳴することなく、精神的錯乱状態に陥り当然の報いを受けた愚かで慎みのない皇帝、と評してきたのも頷けるのである⁽³⁾。

このようなユスティヌス評価には、おそらくその根底に彼がとった2つの政策、つまりペルシア戦争の再開と単性説派迫害に対する厳しい批評がある。前者は誇大妄想的な判断により長期の戦争に突入して多大な犠牲と敗北を招き、後者は単性説派の最終的分離を導く一因になったと見なされるからである⁽⁴⁾。しかし、ユスティヌスは即位当初から理性を失い精神錯乱に陥っていたわけではない。少なくとも即位後数年間は、帝妃ソフィアの支えもあって、正常な帝国統治を行ったはずである。

565年11月14日の夜にユスティニアヌスが没するや、甥ユスティヌス——ユスティニアヌスの姉妹ウィギリантиアの息子——は先帝の聖寝所長官 *prepositus sacri cubiculi* カリニクスや元老院議員一派の支援を得て、当時近衛長官 *comes excubitorum* であった後の皇帝ティベリウスが警護する宮殿にソフィアとともに急ぎ、翌早朝に天使教会で祈

願した後、兵士たちの支える盾に乗り、ついで総主教ヨハネス・スコラスティクスによって戴冠され帝位を継承した⁽⁵⁾。このとき彼はすでに熟年に達していたが、それまでの彼の経歴は決して輝かしいものではなく、名誉執政官のほか、長期にわたり宮廷管理官 *cura palatii* を勤めたにすぎない (552~565年)。しかし、権力の中枢近くにいたこと、ソフィアが先帝妃テオドラの姪であったことが幸いし、彼は幾人かのライバル、ことに著名な将軍であり当時イリクムの軍事長官であった同名のユスティヌスを押し退けて帝位を獲得している⁽⁶⁾。これ以後、ユスティヌスは、鋭い政治的眼力をもったソフィアの力強い助力により、あるいはむしろ彼女との「共同統治」によって、意欲的な帝国統治を行ったのである。このテオドラの姪は夫とともに法令の頭書に署名し、2人の肖像を刻んだ、前例のない貨幣も発行している⁽⁷⁾。

ユスティヌスの精神的バランスが崩れ始めたのは、彼の宗教政策が失敗したころ、つまりカルケドン派と単性説派との和解政策が挫折し、後者の迫害を開始した571~572年ごろのことであろう。それはペルシア戦争の戦況悪化、とくに573年11月のダラ陥落によって決定的になったと推察される⁽⁸⁾。ソフィアがユスティヌスの正常時を見計らって当時近衛長官であったティベリウスを副帝に任ずるよう推奨したのはこのころであり、ティベリウスは結局、574年11月に副帝となり、ユスティヌスが578年9月に没するや正帝に即位している⁽⁹⁾。

このように見てくると、ユスティヌスの治世はおおむね3期に分けて理解することができよう。すなわち、第1期は彼がソフィアとともに正常な帝国統治を行った時期 (565~571/2年)、第2期は彼が精神的バランスを崩し始め、ソフィアが事実上、単独で政権を支えた時期 (572~574年)、第3期はティベリウスが副帝に即いてソフィアとともに統治した時期 (574~578年) である。ポワティエの聖ラデグンデイスがビザンツ宮廷に「主の十字架」の木片贈与を請願し、それが彼女の創設した修道院に贈られてきたのは、ユスティヌス治世の上記第1期のことである⁽¹⁰⁾。

2 ユスティヌス2世の宗教政策

上記の第1期当時、ユスティヌスはどのような宗教政策を展開したのであろうか。この点を考察するにあたり、まずは即位前の彼の信仰について見ておきたい。

エフェソスのヨハネスによれば、即位前のユスティヌスとソフィアは単性説派であった⁽¹¹⁾。ソフィアが叔母⁽¹²⁾であった先帝妃テオドラの影響によりキリスト単性論を熱心に信奉し、ユスティヌスが感化されたためであるが、しかしテオドラの没後、おそらくユスティヌスの即位3年前ごろには、2人は単性説信奉が帝位獲得の障害になると考えたソフィアの政治的判断により正統派に宗旨変えしたと考えられる⁽¹³⁾。事実、このころカエサリアの主教テオドルスは、ソフィアに対して、ユスティニアヌスはカルケドン派でない者に権力を委譲することはないと進言し⁽¹⁴⁾、また教会は「皇帝の正統信

仰」が帝国の原則であると主張していた⁽¹⁵⁾。

正統派へ移った後、ユスティヌスとソフィアの信仰は変容したのであろうか。この点は微妙な心の問題でもあり、歴史家の見方にも差異があるが⁽¹⁶⁾、上記のような改宗の経緯から推測すれば、1つの見方として、2人は少なくとも当初のうちは単性説を秘かに信奉していたか、少なくとも同派に好意を抱いていたと考えることが可能であろう。2人の改宗は宗教的動機ではなく、むしろ政治的動機に基づくものであったからである。

こうした見方は当時の単性説派運動を研究する歴史家に認められる。その代表的な1人である W. H. C. フレンドによれば、宗旨変えにもかかわらず、ユスティヌスはセウエルス派単性説に「より好意的」であり、テオドラによく似た性格のソフィアは、彼女ほど有能ではなかったが、単性説教義の「熱心な信奉者」であった⁽¹⁷⁾。その一論拠として、彼はミカエルが記述した先のアレクサンドリア総主教テオドシウスの処遇を取り上げている。ミカエルによれば、ユスティヌスとソフィアは、538年以来先帝ユスティニアヌスによって同総主教座を追われていたテオドシウスを、帝位継承後ただちに総主教にふさわしい名誉をもって受け入れ、和解を実現して、その総主教座に復帰させることを約束している。その上、2人はテオドシウスがまもなく他界して荘厳な葬儀が举行された際(566年6月)、テオドラの孫であり過激な反カルケドン主義者であった修道士アタナシウスが、カルケドンの信条を断罪する頌徳文を堂々と唱えるのを認めている⁽¹⁸⁾。

フレンドは、また、皇帝夫妻の正統派改宗後も単性説派がまだ分離の方向に進んでいない証として、即位当時のユスティヌスに対するエジプト単性説派の忠誠心を示す史料に注目している。彼らは当時、新皇帝の肖像を歓喜で迎えた。エジプトの詩人であり地方的名士であったディオスコルスは、ユスティヌスの肖像がエジプトのテーベの公府アプロデイトに届いたとき、頌詩を詠んで新時代への希望を表現し、新帝を生命や有徳をもたらす者、キリストを愛する皇帝として歓迎している。そしてさらに「神からの贈物であり人類の名声を高める信仰を陛下は高揚される」とまで詠っている⁽¹⁹⁾。フレンドにとって、この頌詩は東方の単性説派の同時代人たちが宗旨変えしたユスティヌスをなお単性説信奉者、少なくともその共鳴者と見なして歓迎していたことを物語るものであった。

フレンドによれば、こうしたユスティヌスとソフィアの親単性説的体質は、東部への帝国の重心移動と相俟って、ユスティヌスの統治政策に反映されていく。彼によれば、ローマ教皇は三章問題やランゴバルド族の圧力によって効果的な干渉はできず、新旧ローマの絆は希薄化していた。帝国がローマ的からギリシア的になろうとしていた。こうした情勢下にあって、ユスティヌスは先帝が獲得した西方の再征服領を保持しつつも、アヴァール族、スラヴ族さらにはペルシア人たちによって脅かされていた帝国の中

東部諸州の保全に全力を傾注していく。エジプトや、ペルシアとの国境を越えて展開するシリア地方の単性説派の処遇は、それゆえ宗教的にも政治的にもユスティヌスの帝国統治における最重要課題の1つであり、565～572年における彼の宗教政策は東部の単性説派を気遣った政策、東部の単性説派に配慮した教会の平和政策であった⁽²⁰⁾。

フレンドの見解は、主として12世紀に記述されたシリアのミカエルの『年代記』と、その主史料である単性論者エフェソスのヨハネスの記述に基づいているが、A. カメロンはこうした東方側の「偏った史料」に依拠した解釈に疑問を抱き、僅かながら存在する西方側の関連史料に注目する必要があると説いた。彼は東方側の史料のみならず、西方側の史料を考慮すれば、ユスティヌスの宗教政策がもっと複雑な様相を呈していたことを認識できるのではないかと考えたのである⁽²¹⁾。

ユスティヌスとソフィアの信仰に関しては、カメロンはミカエルの記述に基づいた帝位獲得のための改宗説にも疑問を投げ、565年当時のユスティヌスが単性説派に無条件に好意的であったとは言いきれないと主張する。その論拠の1つとして、彼はユスティヌスが正統派の柱行者シメオン2世の信奉者でもあったことを指摘している⁽²²⁾。しかし、それ以上にカメロンは、当時の皇帝の最重要関心が、教義内容そのものより、教会の平和、帝国の統一を目指して各宗派の均衡を設定することにあったと説く。彼によれば、皇帝が一貫した宗教政策を展開し、それから外れる政策はまったく行なわなかったと考えるのは稚拙な思考である。宗教論争において、各宗派は皇帝の支持を得ようと努め、皇帝はそれに応えるべく対処した。それゆえ、単性説派の歴史家による単性説派への皇帝夫妻の共鳴的記述は用心してかからなければならないのである⁽²³⁾。

ユスティヌス2世の治世、ことに彼の宗教政策に関しては、カメロンの指摘は十分に考慮する必要があるだろう。そこで以下では、フレンドの記述をカメロンが取り上げた西方側の史料と照合しながら見直し、ユスティヌスの治世の第1期、すなわち565～571/2年ごろの宗教政策の推移を描出してみたい。

新皇帝ユスティヌスの最初の仕事は、先帝ユスティニアヌスの宗教政策の是正であった。536年以来、ユスティニアヌスはカルケドン派との和合に抵抗する単性説派の主教、聖職者、修道士たちを投獄あるいは追放し、さらに晩年には両派を統合する教義の探究に固執して、564年には極端な単性論教義であるキリスト受難不可能論 *Aphthartodocism* をカルケドンの信条に矛盾しないと確信し、その正統性を宣言する勅令を發布した⁽²⁴⁾、ユスティヌスは即位するや、まず異端に陥ったユスティニアヌスの過ちを改めて正統信仰に戻し、同時に単性説派との和解に乗り出したと考えられる⁽²⁵⁾。

新皇帝の正統派表明は、ピクラロのヨハネスの年代記に認められる。ヒスパニア生まれのこの年代記者は、ユスティヌスの治世第1年目の出来事として、同帝が「カルケドンの会議に反して書かれたものを破棄した」と記述し、さらに主の祈りの前に全カトリック教会においてコンスタンティノーブルの信条が朗唱されるよう命じたと伝えている

る⁽²⁶⁾。この勅令に関しては、東方側の史料には記述されておらず、したがってフレンドはまったく言及していないが、それがユスティヌスの即位後まもなく新皇帝の基本政策として表明されたものであることは否めないであろう。たしかにヨハネスの記述は短く漠然としており、勅令の日付や内容を正確に読み取ることは困難であるが、しかしヨハネスがこの勅令を566年に起こった2つの出来事、つまり新皇帝の従兄弟でありライバルであった同名のユスティヌスの殺害⁽²⁷⁾と、アエテリウスおよびアッダエウスの陰謀⁽²⁸⁾の前に位置づけていること⁽²⁹⁾、内容面ではカメロンが注目したように⁽³⁰⁾、西方出身の同時代人であるコリップスがやはりこのころ新皇帝の正統派表明を仄めかす記述を残していることなどを勘案すると、こうした解釈が大きく踏み外れているとは考えがたいのである。

コリップスはユスティヌスの即位当時コンスタンティノーブルに居住していたアフリカ生まれのラテン詩人であり、ユスティヌスの登極を祝って熱烈な正統派信奉者であった財務官 *quaestor* アナスタシウスに頌詩を献上している。この頌詩は全4巻からなり、第1～3巻は566年に書かれ、第4巻はおそらく先の諸巻の内容を補足し弁明する意図をもって567年ごろに書かれている⁽³¹⁾。この第4巻にはユスティヌスのコンスル就任(566年1月1日)が描写されているが、そのなかに聖ソフィア聖堂を讃える余談が挿入されており⁽³²⁾、注目すべきことに、そこには新皇帝の宗教政策が聖ソフィア聖堂の威光と結びつけて称賛され、カメロンが指摘したように前記勅令を讃える意図をもつと判断される信条の意識が含まれている⁽³³⁾。この信条に関する一節は、単なる美辞麗句ではなく、このころ東方諸地方で反対が起こっていた勅令を讃えようとする、さりげないが確かな言及と考えられるのである⁽³⁴⁾。

フレンドの記述では、新皇帝ユスティヌスが最初に手がけた仕事は単性説派との和解政策である。彼はその説明として、シリアのミカエルの記述に基づき、セウェルス派単性論指導者であった前アレクサンドリア総主教テオドシウスの名誉回復と、反カルケドン主義の修道士アタナシウスがテオドシウスの葬儀で朗読したカルケドンの決定を断罪する頌徳文を取り上げている。これらの記述はユスティヌスの宗教政策が親単性説派的な皇帝による単性説派寄りの政策であることを印象づける内容となっている⁽³⁵⁾。もちろん、先述のように、ユスティヌスが少なくとも当初は単性説に好意的であった可能性は否めないが、その史料となったミカエルの記述には、やはり誇張が感じられる⁽³⁶⁾。ユスティヌスは即位当時、単性説派のみを厚遇してはいない。彼は強烈な反単性論者であったヨハネス・スコラスティクスをコンスタンティノーブルの総主教座に留め、ヨハネス没後は先帝ユスティニアヌスのキリスト受難不可能論に反対して追放された先のコンスタンティノーブル総主教エウティキウスをその座に戻している⁽³⁷⁾。また、熱烈なカルケドン派であり、のちにエフェソスのヨハネスにより単性説派の迫害責任を負わされることになるアナスタシウスを財務官に任用している⁽³⁸⁾。こうした人事のな

かでテオドシウスとの和解を見るとき、この和解はユスティヌスの親単性説派的な処遇というより、正統派に足場をおいた教会統一政策の一環として捉えうる冷静な処置のように映ってくる。また、アタナシウスの頌徳演説も、皇帝の意思とは関わりなく自由に行われたものと推測される⁽³⁹⁾。両派との良好な関係を保ち、教会の統一を達成するためには、皇帝はこの種の演説内容を規制すべきでなかったと考えられる。

フレンドは、テオドシウスの没後、ユスティヌスが正統派および単性説派の指導者たちとの和解政策に踏み出したと述べる。彼によれば、それはおそらくソフィアの発議によって着手され、566年遅くにはコンスタンティノーブルにカルケドン派と単性説2派との3者会議が実現し、こののちおよそ1年間、両派の聖職者や修道士たちとの間の会議が続けられた。これら一連の会議には、536年以来の迫害で地下組織の形成に尽力し単性説派教会の組成者となる同派の指導者ヤコブ・バラダエウスも参加していた。しかし、それらの会議では三位異体論者と穏健単性論者間の一時的和解は成立しても、それらとカルケドン派との協調関係は築かれなかった。穏健単性説派は妥協案を打ち出して、カルケドンの決定を断罪するヘノティコンが採択され故セウエルスの名誉が回復されるならば、アンティオキアのカルケドン派総主教アナスタシウスを受け入れ2年前にヤコブ・バラダエウスが叙任した彼ら自身の総主教パウルスを廃する、という「驚くべき譲歩」を提示したものの、結局両者の間の和解は進展しなかったのである⁽⁴⁰⁾。

こうしたフレンドの記述には、和解に向けた新皇帝夫妻の熱意のみならず、和解への単性説派側の意欲も盛り込まれている。しかし、ユスティヌスは会議の召集に際して、必ずしも親単性説派的な姿勢で臨んだとは言いがたい。彼は会議の主宰者としてコンスタンティノーブル総主教ヨハネス・スコラスティクスを指名した⁽⁴¹⁾。これは正統派皇帝としての当然の人選であり、彼の宗教上の基本的立場を表明するものでもあるが、そのことは同時に、両派の和解政策に当初より限界があったことを示唆している。強固な反単性論者であるヨハネス⁽⁴²⁾が主宰する会議においては、政治的譲歩はありえても信条上の譲歩はありえない。したがって、故セウエルスの名誉回復はありえても、ニケーア信条に関するカルケドンの決定を揺るがすような譲歩はありえないはずである。

ついでフレンドは、パトリキウス・ヨハネスによる単性説派との交渉の説明に入る。このヨハネスはペルシア王コスロエスへ新皇帝登極の報と恒例の贈物をもたらし、さらにスミア問題⁽⁴³⁾を提起する任務を担って567年3月ごろにコンスタンティノーブルを発ったビザンツ使節団の使者であるが、同時に彼はソフィアおよび彼女から和解の説得を受けたヤコブ・バラダエウスとも会って東部の単性説派との和解を進める使命を帯びており、567年の春のうちには、ペルシアへの使節の任務に先立って、ユーフラテス川の国境沿いに位置する単性説派の中心地カリニクムのマル・ザカイ修道院に多くの単性説派信奉者と話し合う場を設けている⁽⁴⁴⁾。

フレンドは、ミカエルの記述に基づいて、この集会の様様をつぎのように説明する。

パトリキウス・ヨハネスはまず聴衆者を前にして和解の必要性を語り、いかなる重大な問題の討議でも分裂に至らなかつた使徒時代を範とすべきことを説いて、コンスタンティノーブルから携えてきた新しいヘノティコンに言及した。その内容は短く、ニケーア信条を唯一の信仰としてキリストの二性一人格を言明し、同時に三章の断罪、故セウエルスに対する勅令の無効、およびキュリロス時代以来の破門すべての破棄を宣言するものであり、列席した主教や大修道院長たちはこの妥協案に感銘を受け、事態は和合に向けて大きく前進するかに見えた。しかし、このとき多くの修道士や聖職者たちが勅令の提示を求めて騒ぎ出し、暴動が起こって文書が引き裂かれ、指導者ヤコブ・バラダエウスでさえ破門の脅威に曝された。そのためヨハネスは食事をとることもなく、ただちにユーフラテス川を越えてペルシア領へ立ち去らねばならなかつたほどである⁽⁴⁵⁾。

この決裂の唯一の原因として、フレンドはヘノティコンにおけるカルケドン批判の欠如を指摘し、かつ536年以来のヤコブ・バラダエウスの努力が実って、やがて形成されるコプト・ヤコブ教会の“ヤコブ”的要素が育ち組織的反抗を導いたと説く⁽⁴⁶⁾。この指摘は重要であり注目に値する。修道士や聖職者たちの暴動は、彼らの指導者の意図を越えて、カルケドン批判の欠如に憤る集団的組織的信念に基づくものであった。セウエルスやアンティムスの断罪以来、1世紀の間にシリア地方の情勢は大きく変化していた。エジプトやアルメニアを別にすれば、セウエルスの反カルケドン主義への支持は、当初はまだ個人による信仰の選択の問題に留まっており、ヤコブ・バラダエウスをはじめ単性説派の指導者たちも基本的にはなお皇帝に忠誠を示し教会の統一を望んでいた。しかし、ヤコブ・バラダエウスの宣教師たちによるシリアの村々や修道院を中心とした布教活動は、この地方の単性説派に組織的形態をもたらし、ヤコブ教会の設立の方向へ進んでいたのである。事実、ヨハネスはペルシアからの帰途、ガラとカリニクムにおいて再び単性説派と大集会を開催して彼らとの和解に尽力したが、これらの集會も彼らの間に分裂が生じて不成功に終わっている⁽⁴⁷⁾。東方の信仰はもはや個人を越えた集団的問題へと移っていた。カリニクムの決裂はわれわれにこの点を教えているのである⁽⁴⁸⁾。

こうした事態に直面しても、ユスティヌスはなおも忍耐強く単性説派との和解に尽力していく。フレンドおよび彼が依拠した東方側の史料を参照しつつ、その後の経緯を見ていくと、ユスティヌスはガラとカリニクムの軍事司令官に書簡を送り、彼を介してヤコブ・バラダエウスやボストラの主教テオドルスなど単性説派の指導者たちに、いま一度協議のためにコンスタンティノーブルを訪れるよう要請する。このときヤコブ・バラダエウスは修道士たちに拘束されて旅立つことができなかつたが、テオドルスのほか、エフェソスのヨハネス、ノババエの主教ロンギヌス⁽⁴⁹⁾、アンティオキアのパウロスその他の指導者たちは、569～570年に首都で開催された會議に参加して協議した。これによって再度和解への期待が高まると、ユスティヌスは571年に第2のヘノティコンを發布する。

その内容は基本的にはアレクサンドリアの総主教であったキュリロスのキリスト論を繰り返したものであり、ペルソナに関する「不要な議論」には触れず、カルケドンその他の決定事項に言及することを避けている。このとき単性説派の指導者たちは、結局カルケドン派は誤りを自ら認め信条を破棄せざるをえない、という信念をもって、その容認の方向に動くが、単性説派の修道士や聖職者たちはヘノティコンの撤回を求めて激しく反発し、ついにユスティヌスは拒絶に憤って単性説を禁止し弾圧を開始したのである⁽⁵⁰⁾。

こうした経緯は、571年ごろまでのユスティヌスの政策が、宗教面に関する限り、極めて理性的であったことを示している。ヨハネスからカリニクムの報告を受け、和解のための努力が実らなかったことを知った後も、ユスティヌスは異端に対処したカルケドン公会議の教会法上の立場を遵守しており、他方単性説派の指導者たちは今回も妥協の姿勢を示した。この点については、皇帝にまだ忠誠心を抱いていた彼らがいまや老齢となり、より穏和になった点を配慮する必要があるが⁽⁵¹⁾、それ以上に過激な三位異体論者との論争により、セウェルス派がニケーア信条を容認する必要性に迫られていた点も考慮しなければならないであろう⁽⁵²⁾。穏健単性説派は三位異体論とカルケドン教義との間にあって苦慮していたのである。これに対して、若き単性説派の修道士や聖職者たちの間には、カリニクムで表示されたニケーア信条とは相容れない純粋で組織的な信念が萌芽しており、カルケドンの決定に足場をおき単性説派固有の要求を満たそうとしないユスティヌスの勅令の撤回を求めて反発したのである。

フレンドはユスティヌスが迫害に踏み切った動機にふれて、このとき彼はカルケドンの信条——帝位獲得のために便宜的に奉じた信条——の正しさを確信したと主張している⁽⁵³⁾。つまりフレンドはこの時点で初めてユスティヌスが真に正統派の信奉者となったとみなし、そこに親単性説派的であった皇帝夫妻による迫害開始の動機を求めたのであるが、これまで見てきた経緯から判断すれば、この説明は正鵠を射ているとは言いがたい。新皇帝の基本姿勢は、即位以来、一貫して正統派に足場をおいた教会の統一にあり、カルケドンの決定は決して譲歩されることがなかった。単性説派との和解交渉は、あくまでそうした教会統一政策の基本的枠内で行われたものであり、迫害の開始は単性説派がその枠組を逸脱する存在になったと判断されたからにはほかならないであろう。

3 「主の十字架」の木片贈与の宗教的意味

以上の経緯から判断すると、ポワティエの「十字架」は当時のユスティヌスの教会統一政策を表示する1つの証と考えられる。ラデグンディスの使者は568年ごろにガリアを出発し、ユスティヌスとソフィアの厚意により、569年には「主の十字架」の木片、つまりポワティエの「十字架」が他の聖遺物や美しい福音書とともに聖十字架修道院に到着した⁽⁵⁴⁾。この時期はパトリキウス・ヨハネスによるカリニクムの会議の決裂後

であり、単性説派迫害以前であって、当時、皇帝夫妻は東方の単性説派へ気を遣い神経を尖らせていた時期であるが、キリスト教世界の中でも最高の聖遺物の贈与は、同時に2人が西方の教会にも関心を保ち、西方の正統派も気遣っていたことを物語っている。このころユスティヌスとソフィアはローマ教皇へも2人の肖像を刻んだ金箔銀製の十字架(高さ40cm, 腕幅31cm)を贈ってもいる⁽⁵⁵⁾。この十字架もポワティエの「十字架」と対をなして、教会統一のために東西双方の教会に気を配っていた当時のビザンツ宮廷の基本的な姿勢を物語るものであろう。

皇帝夫妻による「主の十字架」の木片贈与を詠った西方の同時代人フォルトゥナトゥスの詩は、彼らに対する西方側の見方を表示している。このイタリア人は、ガリアの聖マルティヌス廟を訪れた後、終生ポワティエに留まってラデグンディスと親交を保った著名なラテン詩人であり、ポワティエの「十字架」の到来に立ち会い、第I章で見たようにラデグンディスの名前でビザンツ宮廷に感謝の詩『皇帝ユスティヌスおよびソフィアへ』を書き送っている⁽⁵⁶⁾。この詩はユスティヌスとソフィアに宛てられた2つの等分の節からなり、それぞれ前者はコンスタンティヌス、後者が同帝の母であり「主の十字架」の発見者とされるヘレナに喩えられ、この2人の「アウグストス」*'Augustos'*が終始比類なき対の統治者として扱われている。そこには「テオドラの姪であり熱烈な単性説信奉者」であったとする東方的なソフィア像はまったく見られない。それどころか、フォルトゥナトゥスは、彼女の発議で「主の十字架」の木片贈与が実現したことに感謝しつつ帝妃の正統派信奉を称えている⁽⁵⁷⁾。

それ以上に、フォルトゥナトゥスの詩は教義面で注目される。彼はまず冒頭の10行に神学上の定義を伴った三位一体の挨拶を添え、その上でユスティヌスがカトリックの教義に忠実であることを称えて、「ローマとローマ世界はユスティヌスによりどれほど正しく治められていることか。帝はペテロの座によって表明された信条に恭順である」と詠う⁽⁵⁸⁾。そして、さらに彼は、これまで揺らいでいた教会の信仰も強められ輝いており、尊ばれるべき法が戻っていると表明し、「新皇帝がカルケドンの決定を遵守している」ことに感謝するとともに⁽⁵⁹⁾、いまやキリストと皇帝が一体となっており、その事実にローヌ川、ライン川、ドナウ川、エルベ川からガラエキア、ヴァスコニア、カンタブリア、さらにはブリタニアに至るまで全西方が歓喜していると説いている⁽⁶⁰⁾。カメロンはフォルトゥナトゥスのこの詩と彼の作と見なす「マリアの称賛」⁽⁶¹⁾を取り上げ、それらと先述したコリプスの頌詩の執筆期および表現形態に着目して、コンスタンティノーブルに派遣されたラデグンディスの使者を介して、フォルトゥナトゥスがコリプスの作品の写しを入手し参考にしたと考える。そして前者の作品も、後者の作品と同じく、ビクラロのヨハネスが記載した勅令の内容を裏づける1史料であると主張している⁽⁶²⁾。この見方は推察の域を出ないが興味深い。われわれは、少なくともフォルトゥナトゥスの作品を通して、当時の西方人たちが新皇帝夫妻を信頼し、彼らの宗教

政策が決して単性説派寄りのものではなく、カルケドンで確認された信条に忠実なものであると確信していたことを学ぶことができよう。ポワティエの「十字架」には、そうしたユスティヌスの宗教政策と西方人たちの皇帝夫妻への信頼が背後に存在しているはずである。

註

- (1) 「はじめに」註(3), 『人間文化』第19号(2004年), 213頁, 拙著『中世成立期の地中海世界』南窓社, 1997年, 29~30, 38頁参照。
 - (2) E. Kislinger, *Der Kranke Justin II. und die ärztliche Haftung bei Operationen in Byzanz*, in, *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinischen Gesellschaft*, t. 36 (1986), pp. 39-44.
 - (3) A. Cameron, *The Early Religious Policies of Justin II*, in, *The Orthodox Churches and the West, Studies in Church History*, ed. D. Baker, Oxford, t. 13 (1976), pp. 51-52. A. H. M. Jones, *The Later Roman Empire 284-602: A Social Economic and Administrative Survey*, vol. 2, Oxford, 1973, pp. 304-306. M. Whitby, *The Emperor Maurice and his Historian: Theophylact Simocatta on Persian and Balkan Warfare*, Oxford, 1988, p. 11. etc.
 - (4) A. Cameron, *The Early Religious Policies*, pp. 51-52. A. H. M. Jones, *op. cit.*, vol. 2, pp. 304-306. M. Whitby, *op. cit.*, p. 11.
 - (5) Coripp., *Laud. Iust.*, I, lin. 75-88, 122-155, II, lin. 84-298, ed. J. Partsch, in, *MGH, AA*, t. III-2, Berlin, 1897, München, 1981. vid. F. C. Corippus, *In Laudem Iustini Augusti minoris Libri IV*, edited with translation and commentary by A. Cameron, London, 1976. Corippe, *Éloge de l'Empereur Justin II*, Texte établi et traduit par S. Antès, Paris, 1981. Evagr., *HE*, V, 1, eds. J. Bidez, L. Parmentier, London, 1898, repr. Amsterdam 1964. vid. Évagre, *Histoire ecclésiastique*, tr. A.-J. Festugière, in. *Byz*, t. 45-2 (1975). Evagrius, *The Ecclesiastical History of Evagrius Scholasticus*, tr. M. Whitby, Liverpool, 2000. *RLRE*, IIIA, pp. 754-756. J. A. S. Evans, *The Age of Justinian: The Circumstances of Imperial Power*, London/NY, 1996, 2000, pp. 263-264. L. Garland, *Byzantine Empresses: Women and Power in Byzantium, AD 527-1204*, London/NY, 1999, p. 41. K. Groh, *Geschichte des oströmischen Kaisers Justin II*, Leipzig, 1889, Darmstadt, 1985, pp. 37-39, 42-44.
- このような一連のスムーズな運びは、事前にソフィアやティベリウスをはじめとするユスティヌス派による周到な打ち合わせがあったことを推測させる。ユスティヌスがヒッポドロームに赴き、民衆に歓呼で迎えられて演説したのは、この戴冠後のことである。ティベリウスはこのときすでにユスティヌスに協力し、計画が混乱なく実行されるよう配慮したものと考えられる。なお、ヨハネス・スコラスティクスは、キリスト受難不可能論に反対してユスティニアヌス帝により565年1月に追放されたエウティキウスにかわってコンスタンティノーブルの総主教(565-577)となったヨハネス3世スコラスティクスのことである。vid. *PLRE*, IIIA, p. 671. *ODB*, p. 751.
- (6) J. A. S. Evans, *op. cit.*, p. 264. L. Garland, *op. cit.*, p. 41. 同名のユスティヌスについては、註(27)を参照。
 - (7) A. Cameron, *The Early Religious Policies*, p. 51. —*The Empress Sophia*, in, *Byz*, t. 45 (1975), pp. 5, 10-11. カメロンはソフィアをテオドラと同じく、あるいは多くの点でむしろ叔母以上に興味深い人物と評価している。註(12)参照。
 - (8) Johan. Eph., *HE*, III, 3-6, ed. et tr., E. W. Brooks, in, *Corpus Scriptorum Christianorum*

- Orientalium*, vol. 105, 106, *Scr. Syri*, t. 54, 55, Paris, 1935, Louvain, 1952. Mich. Syr., *Chron.*, X, 15, 16, ed. et tr., J.-B. Chabot, (*Chronique de Michel le Syrien, patriarche jacobite d'Antioche, 1166–1199*), t. II, Paris, 1901. Theoph. Sim., *Hist.*, III, 11, 13, 16, ed. C. de Boor (1887), repr. with corrections by P. Wirth, Stuttgart, 1972. vid. *The History of Theophylact Simocatta, An English Translation with Introduction and Notes* by Micael and Mary Whitby, Oxford, 1986. Evagr., *HE*, V, 13. Johan. Bicl., *Chron.*, s. a. 574, ed. Th. Mommsen, in, *MGH, AA*, t. XI (Chron. Min, vol. II), Berlin, 1894, München, 1981. A. H. M. Jones, *op. cit.*, p. 36. A. Cameron, *The Early Religious Policies*, p. 51.
- (9) Johan. Eph., *HE*, III, 3–6. Evagr., *HE*, V, 19, 23. Theoph. Sim., *Hist.*, III, 16. *PLRE*, IIIA, pp. 754–756, IIIB, pp. 1323–1326. A. H. M. Jones, *op. cit.*, vol. 2, pp. 306, 308.
- (10) 拙訳「パウロニウシア『聖ラデグンデイス伝』」(3) 添付「ラデグンデイス関係年表」註(14)(15), 『人間文化』第18号(2003年), 226頁, 拙稿「聖ラデグンデイスとビザンツ宮廷——ポワティエの「十字架」の宗教的政治的背景——」(1), 『人間文化』第19号(2004年), 208頁。同(2), 『人間文化』第20号(2005年), 305頁参照。
- (11) Johan. Eph., *HE*, III, 2–10. vid. *PLRE*, IIIB, p. 1179. L. Garland, *op. cit.*, p. 44.
- (12) テオドラには2人の姉妹コミトとアナスタシアがいたが, カメロンやガーランドによれば, ソフィアはテオドラの姉コミトと将軍シッタスとの間に生まれた娘と推定できる。vid. A. Cameron, *The Empress Sophia*, pp. 5–6. L. Garland, *op. cit.*, p. 40. cf. Procopius., *Anecdota sive Historia Arcana*, 9, ed. J. Harry, rev. G. Wirth, in, *Opera Omnia*, vol. 3, Leipzig, 1963. Johan. Eph., *HE*, III, 2–10. Coripp., *Laud. Iust.*, pref., lin. 23, 165, 210, II, lin. 169, 171. *PLRE*, IIIA, p. 329, IIIB, p. 1240.
- (13) L. Garland, *op. cit.*, p. 44.
- (14) Johan. Eph., *HE*, III, 2–10. L. Garland, *op. cit.*, p. 44.
- (15) K. Groh, *op. cit.*, p. 44. vid. Coripp., *Laud. Iust.*, II, lin. 160. Evagr., *HE*, 39–41.
- (16) この点は, こののちの本文で見えていく。
- (17) W. H. C. Frend, *The Rise of the Monophysite Movement: Chapters in the History of the Church in the Fifth and Sixth Centuries*, Cambridge, 1972, p. 317. このようなフレンドのソフィア評価は, カメロンのそれと対照的である。註(7)参照。
- (18) Mich. Syr., *Chron*, IX, 30, X, 1. *PLRE*, IIIA, p. 147.
- (19) W. H. Frend, *op. cit.*, p. 317. vid. H. I. Bell, *An Egyptian Village in the Age of Justinian*, in, *Journal of Hellenic Studies*, t. 64 (1944), pp. 21–36. L. S. B. MacCoull, *Dioscorus of Aphrodito: his Work and his World*, Berkeley, 1988, pp. 72–76. J. A. S. Evans, *op. cit.*, p. 267. *PLRE*, IIIA, pp. 404–406.
- (20) W. H. Frend, *op. cit.*, pp. 317–320.
- (21) A. Cameron, *The Early Religious Policies*, pp. 52–53, 62. カメロンが取り上げる西方側の史料は, ビクラロのヨハンネスの『年代記』, 新皇帝登極を記念して詠まれたコリップスの『ユスティヌス頌詩』, ポワティエの「十字架」到来時に詠まれたフォルトゥナトゥスの感謝の詩『皇帝ユスティヌスおよびソフィアへ』である。それらの史料内容については, 本章で後述する。
- (22) A. Cameron, *The Early Religious Policies*, pp. 53, 62. この点については, ガーランドも同様の指摘をしている。なお, グロフはユスティヌスが「正統派教会の教義に過度に心服していた」とみなし, そこに後の単性説派迫害の原因を求めている。vid. L. Garland, *op. cit.*, pp. 45–46. K. Groh, *op. cit.*, p. 45.

- (23) A. Cameron, *The Early Religious Policies*, p. 62.
- (24) A. H. M. Jones, *op. cit.*, vol. 2, pp. 286–287, 297–298. J. A. S. Evans, *op. cit.*, pp. 183–192, 253–263. J. Moorhead, *Justinian*, London/NY, 1994, pp. 128–129, 173–174.
- (25) A. H. M. Jones, *op. cit.*, vol. 2, p. 306. J. A. S. Evans, *op. cit.*, p. 268.
- (26) Johan. Biclár., *Chron.*, a. 567(?). ed. Th. Mommsen, in, *MGH, AA*, t. XI, (*Chron. Min.*, vol. II), Berlin, 1894, München, 1981: ea, quae contra synodum Chalcedonensem fuerant commentata destruxit...
- (27) このユスティヌスはユスティニアヌスの従兄弟ゲルマヌスの息子である。彼は著名な將軍でありユスティヌス2世の最大のライバルであったために、ユスティヌスの即位後にアレクサンドリアに追放され、おそらくソフィアの命で暗殺された。Johan. Biclár., *Chron.*, a. 568(?). *PLRE*, IIIA, pp. 750–754. J. A. S. Evans, *op. cit.*, pp. 264–265.
- (28) この陰謀はアエテリウスとアッダエウスが新皇帝を毒殺しようと企てたとされる事件であり、彼らはおそらく566年10月3日に処刑された。將軍ユスティヌスの殺害事件がアエテリウスとアッダエウスの陰謀の火種となった可能性がある。vid. *PLRE*, IIIA, pp. 14–15, 22.
- (29) Johan. Biclár., *Chron.*, a. 568(?), 1, 2.
- (30) A. Cameron, *The Early Religious Policies*, p. 55.
- (31) Coripp. *Laud. Iust.*, IV, lin. 111–156. 註(5) 掲載訳書参照。A. Cameron, *The Early Religious Policies*, pp. 54–55. *PLRE*, IIIA, pp. 64–65, 354–355.
- (32) Coripp. *Laud. Iust.*, IV, lin. 264–325.
- (33) Coripp. *Laud. Iust.*, IV, lin. 292–294: internis oculis illic pia cernitur esse indivisa manens patris genitique potestas spiritus et sanctus. substantia creditur una,...
- (34) A. Cameron, *The Early Religious Policies*, p. 55.
- (35) W. H. Friend, *op. cit.*, p. 317. 註(16) 参照。
- (36) ガーランドもミカエルの誇張を指摘する。L. Garland, *op. cit.*, p. 45.
- (37) *PLRE*, IIIA, pp. 671–672. *ODB*, II, pp. 759, 1047. 註(5) 参照。
- (38) *PLRE*, IIIA, pp. 64–66.
- (39) L. Garland, *op. cit.*, p. 45.
- (40) W. H. Friend, *op. cit.*, p. 318.
- (41) Mich. Syr., *Chron.*, IX, 30.
- (42) Johan. Eph., *HE.*, III, 2–17. エフェソスのヨハネスは、570年代初頭に始まる単性説派迫害の責任を大部分このヨハネスに負わせている。*PLRE*, IIIA, p. 1047. L. Garland, *op. cit.*, p. 45. A. Cameron, *The Early Religious Policies*, p. 54.
- (43) カフカス地方に属するスアニア地域は、ビザンツ・ペルシア双方が領有を主張する土地であり、当時はペルシアが占領していたが、ユスティヌスはこの地域をペルシア側の侵入を防ぐ天然の要害の地と見なして、その獲得に執着していた。Men. Prot., fr., 11, Block., 6–1 (*Exc. de Leg. Rom.* 3). Theoph., Byz., fr. 15, ed. C. Mueller, in, *Fragmenta Historicorum Graecorum*, t. IV, Paris, 1851. E. Stein, *Studien zur Geschichte des byzantinischen Reiches, vornehmlich unter den Kaisern Justinus II und Tiberius Constantinus*, Stuttgart, 1919, pp. 6, 8–9, n. 8. A. M. H. Jones, *op. cit.*, vol. 2, p. 294. P. Goubert, *Byzance avant l'Islam*, t. 1, *Byzance et l'Occident sous les successeurs de Justinien, l'empereur Maurice*, Paris, 1951, pp. 63–64.
- (44) W. H. Friend, *op. cit.*, p. 319. vid. Men. Prot., fr., 15–17, Block., 9–1, 2, 3, (*Exc. de Leg. Gent.*, 5–6). Mich. Syr., *Chron.*, X, 1. *PLRE*, IIIA, pp. 672–674. G. Greatrex, S. N. C. Lieu (eds.), *The Roman Eastern Frontier and the Persian Wars*, pt. II, *AD 360–630, A narrative sourcebook*, London/NY,

2002, p. 135.

なお、タートレドーヴェはメナンドルスの記載するヨハネスとミカエルの記載するヨハネスを別人と見なして、ユスティヌスは即位後ペルシア王コスロエスの下へ相次いで2つの使節団を派遣したと説く。彼によれば、メナンドルスの記載するヨハネスは566年早春にコンスタンティノープルを發ち、ペルシア宮廷で新皇帝登極を報告し、スアニア問題を提起した‘ヨハネス・コメンティオルス’であり、他方ミカエルの記載するヨハネスは567年早春にコンスタンティノープルを發ち、カリニクムで単性説派と会合した後、ペルシア宮廷を訪れ、562年に締結された平和条約の更新のために7年分の年金を手渡した‘カリニクムのヨハネス’であった。彼の主張の根底には、同一人説の場合、新皇帝登極の報告に2年間の隔たりがあり「遅すぎる」という疑問がある。しかし、グレートレクスによれば先帝ユスティニアヌスの即位の報告もおよそ2年間の開きがあり、同一人説でも矛盾はなかろう。H. Turtledove, *Justin II's Observance of Justinian's Persian Treaty of 562*, in, *BZ*, t. 76, pp. 292-301. G. Greatrex, *Rome and Persia at War, 502-522*, Leeds, 1998, p. 160.

- (45) W. H. Friend, *op. cit.*, pp. 319-320. vid. Mich. Syr., *Chron.*, X, 2.
- (46) W. H. Friend, *op. cit.*, p. 320.
- (47) Mich. Syr., *Chron.*, X, 2. *PRLE*, IIIA, p. 673.
- (48) こうした分裂はまもなくコスロエス2世に利用されていく。vid., M. Whitby, *op. cit.*, pp. 213-215. G. Greatrex et al. (eds.), *op. cit.*, p.136.
- (49) Mich. Syr., *Chron.*, X, 2. W. H. Friend, *op. cit.*, pp. 300-301, 321. ロンギヌスは、567年ごろ、ユスティヌスにより紛争誘発者として首都に監禁された。しかし、ユスティヌスはこれを詫びて彼に出席を要請している。
- (50) Johan. Eph., *HE*, III, 1-4, 5, III, 2-17. W. H. Friend, *op. cit.*, pp. 321-323. L. Garland, *op. cit.*, pp. 46-47. A. H. M. Jones, *op. cit.*, vol. 2, p. 306. J. A. S. Evans, *op. cit.*, p. 268, etc.
- (51) W. H. Friend, *op. cit.*, p. 319.
- (52) W. Treadgold, *A Concise History of Byzantium*, Basingstoke/NY, 2001, p. 69. *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, eds. F. L. Cross, E. A. Livingstone, Oxford, 1951, 1997, pp. 1104-1105.
- (53) W. H. Friend, *op. cit.*, p. 323.
- (54) Baud., *V. S. Rad.*, 16, ed. B. Krusch, in, *MGH, SRM*, t. II, Hannover, 1888, 1956. Greg. Tur., *Hist. Franc.*, IX. 40, eds. B. Krusch, W. Levison, in, *MGH, SRM*, t. I, ps. 1, fasc. 1-3, Hannover, 1884-1885.
- (55) *The Art of Byzantium, Textes and Notes by D. T. Rice, Photographs by M. Hirnar*, London, 1959, pp. 42, 305. A. Cameron, *The Early Religious Policies*, p. 59. なお、この十字架の贈与の時期については、ライスは575年ごろ、カメロンはボワティエの十字架の贈与と同時期としている。両説とも明確な根拠は示されておらず、推測の域を出るものではないが、ライス説がユスティヌスの精神的バランスの崩れた後であることを考慮すると、カメロン説の方が受け入れやすいであろう。
- (56) Ven. Fort., *App. Carm.*, II, *Ad Iustinum et Sophiam Augustos*, ed. F. Leo, in, *MGH, AA*, t. IV, ps. 1, Berlin, 1885, München, 1981.
- (57) *Ibid.*, lin. 55-100.
- (58) *Ibid.*, lin. 15-16; *quam merito Romae Romanoque imperat orbi qui sequitur quod ait dogma cathedra Petri...*
- (59) *Ibid.*, lin. 25-26; *quoniam nova purpura quidquid concilium statuit Calchedonense tenet.*

- (60) *Ibid.*, lin. 27–40.
(61) Ven Fort., *Carminum Spuriorum Appendix*, I, *In laudem sanctae Mariae*, ed. F. Leo, in, *MGH, AA*, t. IV, ps. 1, pp. 371–380. レオはこの作品をフォルトゥナトゥスの「偽作」*spuria*の1つに入れているが、カメロンはそれを彼自身の作と判断している。A. Cameron, *The Early Religious Policies*, pp. 60–61.
(62) *Ibid.*, pp. 58–61.

略記号 (追加分)

<i>Byz</i>	<i>Byzantion</i>
<i>BZ</i>	<i>Byzantinische Zeitschrift</i>
Coripp., <i>Laud. Iust.</i>	Corippus, <i>In Laudem Iustini Augusti</i>
Evagr., <i>HE</i>	Evagrius, <i>Ecclesiastical History</i> (ed. J. Bidez et al.)
Iohan. Eph., <i>HE</i>	Iohannis Ephesini, <i>Historiae Ecclesiasticae</i>
Mich. Syr., <i>Chron.</i>	Michael le Syrien <i>Chronique</i> (ed. J.-B. Chabot)
<i>ODB</i>	<i>The Oxford Dictionary of Byzantine</i> , 3 vols.
Theoph. Byz. fr.	Theophanes of Byzantium, fragments (ed. C. Mueller)
Theoph. Sim., <i>Hist.</i>	Theophylactus Simocatta, <i>Historiae</i>